

『11月19日未明、東京都内世田谷区のマンションにてピアニストの時任彼方さん（29）が死体で発見された。

発見者は時任さんの知人の女性。時任さんと連絡がとれないのを不審に思いマンションを訪れ、浴槽に上半身を入れて死亡している時任さんを発見した模様。

検死の結果、時任さんの死因は睡眠薬の過剰摂取による自殺と判明。

時任彼方さんは国際的な指揮者時任翔一さんとその妻・深雪さんの長男であり、幼少時より数々の権威あるコンクールで入賞をはたしてきた天才ピアニストだった。

大学卒業後は世界を股にかけコンサートを行っていたが数日前に帰国、自宅マンションで自殺を図ったものと思われる。

音楽界のメフィストフェレスと呼ばれた時代の寵児。

彼を死に追い込んだのは凡人が与り知らぬ天才故の悩みだろうか。時任さんの自宅マンション前には献花が絶えず、彼を起用した広告を見てあまりに早すぎる訃報を悼むファンが続出した』

時任彼方が死んだ。
殺したのは、俺だ。

時任のマンションを訪れたのはアイツの死から一か月が経過し、世間がようやく落ち着きを取り戻し始めた頃だ。連日メディアを賑わせた報道も徐々に沈静化し、誰かが誰かを殺し、誰かと誰かが破局した話題へと移り変わった。シヨッキングで殺伐としたニュースが氾濫し、娯楽として日々消費される世の中では、彼方の死も過去形で処理されるのだ。

アイツの自殺以降マンション前に手向けられていた大量の花束も撤去され、エントランスは閑散としている。

金持ち向けの高級マンションだけあってセキユリティは嚴重、身元の怪しい不審者は通れまい。

『どなたですか』

「先日お電話した時任彼方の友人の斑鳩遥です。時任の両親からも連絡が行つてると思いますが」

『少々お待ちください。身分証はございますか』

ドアの横手のパネルを操作し、四角い液晶に免許証を掲げてみせる。

『失礼いたしました、斑鳩遥さんでお間違いないですね。』

「時任さんのお部屋は11階です」

「ご丁寧にも」

管理人がロック解除、自動ドアがスムーズに開く。玄関を抜けると広大なロビーが迎える。落ち着いた臙脂色のソファアーに観葉植物の鉢植え、奥にはエレベーターが四基並んでいる。

前に来た時と何も変わっていない。

奇妙な既視感に囚われながら歩きます。磨き抜かれた床と天井、吹き抜けの空間に硬質な靴音が響く。

振り返りしな化粧煉瓦の花壇を巡らすエントランスを確かめ、マスコミの姿がないのに安堵する。アイツとの関係を詮索されるのはごめんこうむりたい。

あなたが斑鳩さんですか？

誰ですかあなた。

申し遅れました、私こういう者です。知りませんか週刊××。突然すいませんね、待ち伏せみたいなまねをして。斑鳩さん、あなたあの時任さんと随分親しかったみたいじゃないですか。

大学を卒業してからはたまにしか会ってませんが、今じゃお互い多忙で疎遠です……いえ、でした。

わざわざ過去形に直すなんて律義な人ですね。しかしおかしいな、関係者の話じゃ親友だったって話ですが。学生時代は常に一緒にいたんでしょ、キャンバスを連れ立って歩く姿が目撃されてますよ。

故人に対して冷たい言い方もしませんが、アイツとはただの腐れ縁です。実際大学出てからは年単位で会ってませんし、たまにメールをやりとりする位ですよ。

へえ、どんなメールを？ 保存してますか、見せてくださいよ。

プライバシーの侵害って概念をご存知ですか。個人情報にうるさい世の中で些か無神経すぎるのでは？

これは手厳しい。

迷惑です。帰ってください。

いいじゃないですか、あなただけが知ってる悲劇のピアニストの素顔を教えてくださいよ。

何でアイツの死が悲劇扱いされるのか理解に苦しみますね、勝手に死んだのに。

自殺は負け犬の選択だとおっしゃる？

誤解なさらぬように、自殺や安楽死は個人の権利の範疇と思いますよ、俺はね。自分で死のうと決めて死んだだけなんだから、その動機を世間が云々憶測するのは不毛と言いたいだけです。あなたにもわかりやすく言うと、実にくだらない。何故死のうとしたのか、本人にだってわからない場合もあるのに。

時任さんは希死観念に取り憑かれていたんでしょうか。ネットの履歴では国内では認められてない薬剤を購入していましたか……。

ピアニストは才能が物をいう世界ですから、俺みたいな凡人には与り知らぬ悩みがあったのかもしれないね。

スランプに苦しんでたとか？ その手の相談を受けたことは？

プロがアマチュアに助言を乞うんですか、面白い冗談だ。

そう卑下するもんでもありません、素人だからこそ別角度の示唆がもらえるかもしれないでしょ。

仮にスランプで悩んでたってアイツは独りで解決しますよ、ずっとそうだったんだから。俺個人としてはスランプに陥った時任なんて想像できませんがね。蝶は誰に教わらなくても飛べる、機能に問題なければ足を備えた人間の大半は歩ける、それと同じです。時任彼方であるというだけで天才としての絶対性が確立してるんです、演奏を聞いたならわかるでしょ。

解せませんな……私みたいなケチな記者から見ると、時任彼方にとって自殺は最も縁遠い所業に思える。世間の時任像と事件の本質が結び付かないんですよ。だからみんな躍起になって真実を知りたがる。自殺するのは精神的肉体的に極限ぎりぎりまで追い込まれた人間がやるものでしょ、順風満帆の時任さんにそこまで思い詰めるような悩みなん

てありますか。一年先までびつしりコンサート予定が詰まっていたのに……世界中で脚光を浴び、人が集まるのに比例して、私生活は荒んでいったようですがね。天才の宿命つてヤツですか。

アイツが自殺しても俺の日常には影響ありませんよ、うるさい記者に付き纏われる以外はね。

斑鳩さんはドライな方ですねえ。最近離れてたとはいえ、大学からの友達が死んだんでしょ？さすがに薄情じゃありませんか。自分で死んだんだから同情に及ばないつてのは否定しませんが、裏を返せばそれ以外考えられないほど追い込まれてた証でしょ。私は時任さんが自ら死を選んだ理由が知りたいんです。仕事は順調で世界中にファンがいる、おまけにルックスも上々ときちや女がほうつておかない。まあ、本人はなかなか奔放な性関係を結んでましたがね……異性同性問わず。

関係ありません。興味もない。干渉しないでほしい。

数日前、仕事帰りの不愉快なやりとりを思い出して顔が歪む。どうにか巻いて帰宅したが、執拗な取材に辟易した。

「……死んだあとまでどれだけ迷惑かければ気が済むんだ」
 思えば大学時代から時任はトラブルメイカーだった。初めて会った時からそうだ。
 エレベーターに乗り込んで11階のボタンを押す。点灯したボタンを見上げ、上昇感覚に身を委ねる。

時任彼方との出会いは大学1年の時。

「ねえ、うちの大学に時任彼方がいるんだって」

「誰それ」

「うそっ知らないの、ピアニストの時任彼方」

「親も有名な音楽家だとかでメディア露出も多いよね」

「芸能人ばりの美形だよ」

「子供の頃から国内外のすごい賞総ナメにしてるんだって」

「なんで音大行かないの、ウチフツアの大学だよ」

「そんなの本人に聞いてみなきゃわかんないよ、天才だから私たちとは考えること違うんじゃない？」

アイツと出会ったのは心理学の講義中の階段教室。たまたま隣に座ったのが彼方だった。

「こいこい」

「どうぞ」

涼しげなテノールに目も向けずノートの整理を続ける。隣からまたしても声がする。

「熱心だな、まだ始まつてもないのに」

「前回の要点をさらつてただけだ」

興味津々、俺の手元を覗き込む。そこで初めて隣に目を向け、少し驚く。時任彼方の顔と名前はいやでも知っている、学内一の有名人だ。

音楽家の家系に生まれ、幼少時からピアノリストとして活躍し、何故か音大を蹴つて普通の大学に進んだ変人。

おまけに本人も彫り深い美形、言動は掴み所なくエキセントリックときて、話題性には事欠かない。時任に近付くのが目的で同じ講義を選び、隣に座りたがる女子もいるらしい。

そんな彼が珍しく一人にいる。俺はノートをとる手をとめ、眼鏡のブリッジを押し上げる。

「あとから誰かくるのか？」

「誰が？」

「……友達とか」

「取り巻きつて言いたそうな顔だな」

時任が意味深にほくそえむ。そんな表情は本当に悪魔的だ。メフィストフェレスが受肉したらきつとこんな感じのはず。「わかつてるならいい。真面目に講義を受けたいんだ、邪魔しないでくれたら文句はないよ」

誰もが時任の隣に座りたがる。ただし俺は別として。コイ

ツは常に場の中心で人に囲まれている。俺はなるべく一人でいたい。

学内に友人がいない訳ではないが、大勢で騒ぐのはどうも性に合わない。

それなりにソツなくやれている自負こそあれ、一人で本でも読んでいるほうが余程気持ちが安らぐ。

初対面でギスギスしてしまった。時任に対しては良い印象をもつてないが、だからといって皮肉つてどうする。

たまにキャンパスで見かける時任は男女問わず大勢を侍らし、ともすると自分の分のコーヒーまでファンに貢がせ、その姿は時として傲慢に映った。

否、貢がせるといふと語弊がある。

実際はファンの女学生自ら、時任の関心を買いたいのが為に献上したのだ。

女子大生が自腹を切った缶コーヒーを時任は至極当たり前のように受け取って、プルトップを引いて飲み終えた後、空き缶になったそれをわざわざ彼女の手に戻す。

女子大生は待つてましたと缶を逆さにし、底からたれた一滴をもつたいなさそうに啜るや、間接キスゲットだと友達とじゃれあい騒ぎ立てる。

コイツの周りはそのような人間ばかりだった。

取り巻きが自分の挙動に一喜一憂するのを、時任は死にぞ

こないの蟬でも見るみたいな酷薄な笑みで眺めていた。俺のように内省を好む人間からすれば、あまり近付きたくない人種だ。

「特技は人間観察。あたり？」

突然の指摘に怪訝な顔をする。

こちらに身を乗り出して時任が悪戯っぽく微笑む。

「よく俺を見ているだろう」

「自意識過剰だな」

「昨日目が合ったぞ」

「自販機の前に立っていてコーヒーが買えなかったのなら覚えてるが」

「後出しはよくないぞ、一声かければすぐいたのに」

「盛り上がっていたからな。邪魔したくなかった」

「さわりたくなかった、というのが正直な所だ。」

「自分を殺して空気を読むのが好きなのか。マゾか」

「内輪の空気を壊すのに快感を覚える趣味はないんでな」

「同調圧力に屈する日本人」

「好きに言え」

時任は万事この調子だ。ほぼ初対面の俺にもまるで遠慮なく話しかけてくる。

「神経質な字だな」

「邪魔するならよそへいけ」

「前回の講義出てないんだ、見せてくれ」

「もっと読みやすいノートをとってるヤツに頼んだらどうだ、みんな喜んで貸したがるんじゃないか。サインを入れてやればいい」

意趣返しにやりこめれば、時任が愉快そうに頰杖を付く。

「さつきから落ち着かないな」

「気のせいじゃないか」

「パーソナルスペースが極端に広いとか」

「殆ど初対面の他人とおしゃべりを楽しめるほど社交的じゃないだけさ。相手が有名人でもな」

時任が軽く頷いて受け流し、俺の手元のルーズリーフを素早く没収する。

「何」

「クイズをだしてやる」

「付き合いきれない」

「まあ待って、俺の暇潰しに貢献したらいいことあるぞきつと」

あきれて移動しかけたら、申し分なく長い脚で通せんぼされる。

時任は威風堂々大胆不敵に、俺のパーソナルスペースを犯す。

シャーペンで何かを書き付けたルーズリーフを再び放つて

よこす。反射的に受け止めれば、手書きの五線譜に音符が踊っていた。

「なんだこれ」

「俺の一番好きな曲。何だかあててみる」

「ピアノもないのにどうやって」

「頭の中で弾け」

「無茶いうな、ピアノなんかさわったこともないのに」

「学校の音楽室にあつたら」

「誰も彼もお前みたいに頭の中に音楽が流れてるわけじゃない」

無然と否定すれば、時任は喉の奥でおかしそうに笑ってだらけた頬杖を付く。

「凡人の証明だな。可哀想に」

「そつちこそ、素人相手に知識をひけらかして楽しいか」

「楽しいね、お前の怒る顔を見ただけで得をした。昨日はすぐに目をそらされたが、今日はちゃんとこつちを見てる。あんなに近くにいたのにキレイに無視して、眼鏡の度があつてないんじゃないか心配したんだぞ」

「手のこんだ嫌がらせだな」

コイツと話していると疲れる。不快感と緋い交ぜの苛立ち。

キャンパスで見かけたことはあれど、まともに話すのは今日が初めてというのに、時任はとてもなれなれしくて距離

の取り方がわからない。

指に挟んだシャーペンを器用に回しながら、時任が微笑む。

「名前を聞いていいか？」

「……イカルガヨウ」

「まさか本名？」

「ペンネームなんてないからな」

「出身は奈良か」

「ご名答」

断る理由を考えるのが億劫で正直に答えたら、時任は舌の上で俺の名前を転がしてさらに聞く。

「なんて字を書く」

仕方なくルースリーフの下端に「斑鳩遥」と記す。

「遥でヨウつて読ませるのか、面白いな」

「逍遙つて言葉を知らないか？ あちこちをぶらぶら歩くことだ」

「漠然として掴み所がないな、徘徊とどちらがうんだ」

「語感だろ。お前こそ本名か」

「覚えやすくいい名前だろ、上と下好きな方で呼んでい

いぞ」

「席を移つてくれないか時任」

「断る」

反対側の列を指さし、できるだけ穏便に促すも、素晴らし

い笑顔で即却下される。

「よろしくな遥^{はるか}」

「名前……」

「字は間違っでないだろ？ こつちのほうが呼びやすいし響きが好きだ」

「現役ピアニストは音の好みがるさいな」

それが時任彼方とのファーストコンタクトだった。

結局俺たちは二人並んで講義を受けた。

彼方は途中で飽きたのか、だらしなく頬杖を付いて俺の横顔をニヤニヤ眺めはじめ、集中力を欠いた俺はといえば、その日の内容がちつとも頭に入ってこなかった。